

## マレーシア華人の見た「マレーシア民族」

はら ふ じ お  
原 不 二 夫

はじめに

- I 種族差別軽減・解消への期待
  - II 同化・画一化への懸念
  - III 中間的見解：融合の具体像
- むすび

### はじめに

1991年2月28日にマレーシアのマハティール首相は、1世代30年後に目指すべき国家像として‘Wawasan 2020’（2020年構想：以下「構想」と略す）を発表し、2020年までにマレーシアを先進工業国に引き上げると同時に、「種族的に統合された、協調し、全面的かつ公正な提携関係の下に生きる、一つの‘マレーシア民族’（Bangsa Malaysia）から成るマレーシア国家」を築き上げようと、高らかに謳い上げた。そこでは「あらゆる皮膚の色、信教の人々が、自由に慣習、文化、宗教、信条を保持・実践できる」とされた<sup>（注1）</sup>。

「新経済政策」（実施期間は1971～90年）の下でマレー人優先策が推進され、多かれ少なかれ疎外感を味わっていた華人社会は、当初一般的にはこの「構想」を歓迎する空気が強かった。「構想」は一方で依然マレー人重視を再三強調しているものの、1980年末以来の、とりわけ1990年の「国家開発政策」（National Development Policy：NDP、実施期間は1991～2000年）以来の、マレー人全体の重視から「効率」「発展」

「能力」重視政策への転換の流れの中で、種族の壁を取り払った‘一つのマレーシア民族’実現（つまり、種族間の対等な関係に基づく真の国民融合）への期待が強かったからである。

その後の経緯を華人の側から見ると、経済面（政府大事業への一部華人企業の参加、華人企業とマレー人企業との提携など）、文化面（一部華人習俗の‘マレーシア文化’としての受容、私立華語学院の設立認可など）で対等な関係に基づく国民融合への一定の前進はあったものの、マレー人の政治的優位、マレー企業・企業家育成、マレー文化に基づくマレーシア文化形成が国家政策の機軸に据えられた全体像には大きな変化は現れていない。そのためか、在野勢力を中心にしばしば「マレーシア民族」創出構想に対する疑念が呈されるようになった。マレーシア華人公会（Malaysian Chinese Association：MCA）など与党勢力は依然として支持と期待を表明し続けているから、華人社会ではこの構想を巡ってむしろ亀裂が明白になりつつある。この亀裂は、1998年9月のアンワール副首相解任・逮捕以降の「Reformasi（改革）」運動（反マハティール政権運動）に対して華人社会の対応が割れたことと密接な関係をもつように思われる。

本稿では、「マレーシア民族」に対するこうした両様の対応を詳細に分析し、マレーシア華人が今日置かれた立場の理解に努めると共に、華人の今後のあり方を占う何らかの指標を探っ

てみたい。

Bangsa, Nation, Ethnicity, Race などに対する華文の訳語は、日本語訳同様未だに確定していない。英語そのものの定義も必ずしも確定していない。本稿では、「民族」、「種族」、「国族」など、華文の原典の用語をそのまま用いた。それが現実を最も忠実に反映すると考えられるからである。

また、国王やスルタンから授与される称号の Tan Sri, Dato', Datuk は、それぞれ TS., Dt., Dk. と略記した。

文中の（ ）内は原典の、[ ] 内は筆者（原）の、注記、補足である。

## I 種族差別軽減・解消への期待

### 1. 与党系華人

MCA の林良実(Dk. Dr. Ling Liong Sik) 委員長の国内政治に関する見解・信条をまとめた本が1995年に出版された。同書の中で林委員長の次のような観点が明らかにされている。

独立後世代のマレーシア人(Malaysians)は、マレーシアが多人種(multi-racial)、多元文化、多元宗教の国家であることを絶えず銘記しており、憲法も宗教による国民の差別は行わないと明記している。マハティール首相も議会で「全国民が回教法の施行を望むのでない限り、施行することはない」と明言している(1993年1月19日)。しかし回教党(Parti Islam SeMalaysia: PAS)は非回教徒をも回教の管下に置こうとしている。回教の真の精神が回教政治家によって体現されるなら問題は生じないが、それは、開

明的回教指導者、現実にはあり得ない完全かつ理想的な政府・行政機構によってのみ、可能になるに過ぎない。華人は、回教国家になれば非回教徒は基本的権利を奪われることを銘記せねばならない。野党への投票は回教国家への支持に通ずる(注2)。

マレーシアは、経済強国になったとしても、政策責任者が法律・政治・人道上の制度的発展に注意を払わなければ、重大な誤りを犯すことになる。

回教を西欧民主主義に替わる国家統治の代替策とする考えが再浮上しているが、非回教徒、とりわけ華人がこの思想傾向に対する強靱な政治的防波堤にならないければ、2020年構想の実現は難しい(注3)。

独立後成長した世代は種族差別受け入れに益々難色を示すようになってきているが、国家の将来にしかるべき役割を果たすには、華人は政治的に一体化しなければならない(注4)。

マレーシアの政治局面においては、各党が自らの代表する種族の利害だけを主張しては公正、正義、平等を実現できない。各党は対等な条件の下に協力しなければならない。我々は、忍耐強い交渉、相互理解、妥協による合意を目指す。種族的・文化的・宗教的分極化をできるだけ抑え、種族・文化・宗教間の調和と社会的結集力をできる限り伸ばせば、真の国民統合が達成できる。

MCA に対して華人社会の全面的支援があれば、われわれは華語教育など華人の合法的権利を保全する(注5)。

マレーシアの政治発展を3期に分けるこ

とができる。第1期は独立から1969年まで、第2期は69年以後、種族間対立が政治の中心となった新経済政策期、第3期は新経済政策後の「2020年構想」期である。国家が工業化を達成し政治が全面的発展を遂げれば、種族間の敵対は種族内の敵対に道を譲り、個人主義、公民権、人権に一層重点が置かれるようになる。第3期には国家は一層市民生活の平等、公正（宗教・慣習の自由、母語教育選択の自由、職業選択の自由、公務員就職・大学教育・奨学金取得の合理的権利、など）を追求するようになる<sup>(注6)</sup>。

単一の政党が支配する国民国家であってはいらない。総てのマレーシア人に合理的方法で行動する機会を与え、相互の欠陥を矯正しあうよう奨励せねばならない。

人種的偏見を是正するため、「人種関係法」(Race Relations Act)の制定を求める。同法は、総ての国民に平等な機会を与え、相互寛容の精神に基づいて社会的多様性を認める、真の統合社会の実現を目指すものである<sup>(注7)</sup>。

林委員長と首相との関係が、華人社会指導者の実績を量る鍵である<sup>(注8)</sup>。

NDPは急速な経済成長を前提に、誰もがその分け前にあずかることになっており、その意味で華人は何も恐れることはない<sup>(注9)</sup>。

概してきわめて楽観的である。将来種族間対立が予想される文化、教育、雇用機会、政治的権利などの問題に関しては、政党間（つまり国民戦線各党間）の「対等な」立場での協議によって解決できる、しかもその「鍵」は党首間

の良好な関係にある、とする点、最大の脅威はPASの回教化政策にある、とする点は、後に見る野党系勢力の見解と大きく異なっている。

林委員長はまた、同年、自らの著書の中で次のような主張を展開している。

- (1)マレーシア人であることは、華人性、マレー人性、インド人性を薄めることではない<sup>(注10)</sup>。
- (2)政府は、政府文書、申請書にどこまで種族区別が必要かの見直しをすでに始めている<sup>(注11)</sup>。
- (3)株式会社資本、雇用構成などのマレー人比率の目標はすでにあらかじめ達成された。今や種族差別廃止、能力、効率重視に向け舵を切るときであり、そうした政策の実施にあたり監視機関を設けるべきである<sup>(注12)</sup>。
- (4)1994年現在、華語小学校にマレー人2万7000人を含む非華人3万2000人が通っている<sup>(注13)</sup>。
- (5)華人性、中国文化、華語への愛着とその振興は、中国という国家への帰属感とは全く無縁である。自らの「根」をしっかりと張りつつ、他種族社会との提携を強めよう<sup>(注14)</sup>。
- (6)政府は、外資に認めた奨励策を総て国内資本にも適用するだろう。民営化にはブミブトラ、非ブミブトラともに参加を認められよう。政府は参加の均等性を促し、土地、教育等の不均衡を是正する<sup>(注15)</sup>。

これもきわめて楽観的である。しかも、MCAの如き主張が総て政府の政策として実施されるかの印象を与える。教育政策、経済政策などでUMNOとの意見の相違が明らかになったとき、こうした「公約」は試練に立たされ、野党系華

人の批判にさらされる恐れがある。

もう一つの華人系与党・マレーシア民政運動党 (Gerakan Rakyat Malaysia: GRM) の考えも MCA に近い。林敬益 (Dt. Seri Dr. Lim Keng Yaik) GRM 委員長は1997年8月の第26回党大会で、(1)宗教には寛容・中庸が求められるが、最近一部の州・地方政府が細心さを欠いているのは遺憾、(2)種族の溝はかなり埋まったが、なお努力の要あり、(3)能力を昇進の基準に、必要を分配の基準にしていくなすべきである、(4)種族、宗教上平等な “Bangsa Malaysia” を形成する、(5)国民戦線内各党はできるだけ種族性を薄めねばならない、(6)国民戦線各党の協調によって「構想」を実現する、と、同党の「マレーシア民族」に対する立場を明らかにした<sup>(注16)</sup>。

同党の李裕隆 (Dt. Alex Lee Yu Lung) 副委員長 (国民団結・社会開発省副大臣。いずれも当時) も、1993年に開かれた「構想」をめぐるセミナーで、統一された「マレーシア民族」(united Malaysian nation) 実現には、(1)強力な指導性、(2)開放的な言語政策、(3)社会・政治・経済的不安定を招かない範囲内での公開性・人権の尊重、(4)全マレーシア人への機会均等、(5)全員に受け容れられる国民文化の創造、が必要だと訴えた<sup>(注17)</sup>。

各党が種族代表の立場を保ったまま妥協を探るという MCA の姿勢と、種族性そのものを解消しようとする GRM との間には一定の相違があるが、両党とも、連立与党内 (とりわけ指導者間) の協調によって種族の壁を超えた社会の実現が可能だとする点、UMNO との対等な協議を前提とし、またそのような対等性が可能だと見る点、地方政府の宗教的不寛容を脅威と見る点では共通している。

MCA は1998年に「新マレーシア人」に関する論文コンクールを行い、優秀論文を冊子<sup>(注18)</sup>にまとめて発表した。これらの論文は必ずしも総てが同党の見解と一致しているわけではなからうが、基本的には党見解の枠を外れるものではあり得まい。

小冊子全体の論点は以下のとおりである。

- (1)文化の多元性を尊重し、他民族の長所を吸収しよう。いかなる民族の特性も犠牲にしない。自種族の利益のみを追求せず、共通点<sup>(注19)</sup>を探ろう (存異求同。殊途同帰=道は違うが、帰着点は同じ)。理性と相互容認を基本に、冷静な協議によって目標を達成しよう。
- (2)種族・宗教に依拠し民政を省みない政党は衰退する。政府は回教価値観を奉じつつ宗教的寛容・協調の姿勢をとっている。自由開放、中庸の政治文化を。
- (3)経済機会、教育機会、資源配分は、種族を問わず均等に。
- (4)中産階級の出現・拡大が、種族的偏見を薄め、他族との協力をもたらす。
- (5)苦難の時は政府を信じ団結を。
- (6)マレー同胞に倣って高い政治意識を持ち、高級幹部に対しても大胆な批判を。
- (7)愛国心、マレーシア主体意識、勤勉、実行、進取・創造精神、全地球意識など<sup>(注20)</sup>。

種族差別のない社会が与党内の話し合いによって実現しうる、マハティール首相を中心とする現政府はそうした寛容さ、冷静さを備えている、と見る点では、両華人系与党首脳と一致しているが、(6)の「大胆な批判」だけは異質であり、幹部と一般党员との間に溝のあることを窺

わせる。ただし、ここで論文の筆者が政府与党批判が有効と見ているのに対して、野党系論者は現状では批判は汲み上げられる術をもたないと見ている点は、大きく異なる。

## 2. 華字紙

華字紙の論調一般には、協議によって、各民族が対等な権利・地位を認められる社会、さらには種族を超えた社会が実現する、と見る論調は少数派のようだ。本節ではそうした少数派のやや楽観的な見解を取り上げる。

1995年7月末、ガザリ・シャフィー(TS. Ghazari Shafie)元内相の「法律で『マレーシア民族』を創り出すことはできるが、慎重に」との言葉が華字社会に大きな反響を巻き起こし、マハティール首相がわざわざ立法化を否定する出来事があった。ガザリ元内相は、『『2020年構想』の下で、誰もが受け容れられるマレーシア民族文化価値観を創り出すのが最善。小学校教育を通し、マレーシア文化を生活の基礎に、マレーシア語を日常語に』と説いたのである(注21)。

これに対し『中国報』同年9月2日は、「各民族の先天的な違いを消滅させて一つの民族に統一するべきではない。外国人と対する時は自然に自らをマレーシア人と紹介するなど、すでに實際上マレーシア民族は形成されている。マハティール首相も『改めて“創り出す”必要はないし、法によって“創り出す”つもりもない。自然の発展に委ねるべきだ』と述べている。ただし、政策、教育、交流により、共通思想、平等互惠の民族を生み出せる」と論じ(注22)、『星洲日報』同年8月18日は、マハティール首相の「マレーシアに生まれた者は、マレー人、華人、インド人の種族に関わりなく、皆マレーシア民族である。マレーシア民族は必ずしもマレー語

(ママ)ができる必要はなく、マレーシアに忠実でありさえすればよい」との同月17日の発言を、ガザリ提言に対比させる形で好意的に報じている。『南洋商報』同年9月7日もこのマハティール発言を「多元的文化・社会・宗教・価値観を認め、各民族の生存権均衡、相互尊重を前提としている」と歓迎した(注23)。

『南洋商報』紙上に1993～95年に掲載された林金枝(Lin Jin Zhi)の評論が、1996年に南洋商報社から一冊の本として出版された。著者は中国福建省の廈門大学経済学部を卒業した後マラヤ大学経済学修士を得た中国の経済学者だが、論調はマレーシア政府にかなり好意的である。それ故にこそ政府系華字紙『南洋商報』に重用されたものであろう。彼の論点は次のようなものである。

- (1)マレー民族、華裔民族(ママ)、印裔民族、などなどは人種・文化規定、マレーシア民族[Bangsa Malaysia]は政治規定であって、政治規定は変容しやすい。
- (2)民族主義は進歩的役割を果たす時期もあるし、後ろ向きの役割を果たす時期もある。民族主義は独立をもたらしたが、他民族圧迫、排外主義と化す恐れもある。西側はソ連内の民族主義の高まりを歓迎したが、諸共和国独立後の種族衝突を見て種族主義を非難した。
- (3)多民族国家では、文化一元化を強行して根無し草民族を生むことがある。
- (4)国民団結のために文化融合は必要である。同化(assimilation)でなく統合(integration)が望ましい。多元文化、相互交流、新しい文化の創造は、目下のところかけ声のみである。政府は開明的な姿勢を示しているの

だから、華人はこの好機に具体的な行動を採るべきだ。

- (5) マレー人によるマレーシア全面支配を目指すという UMNO の長期目標は変わっていない。マレー人は権力を握ってのみ現代化可能である。他方、マレー人に競争原理を導入し優秀なマレー人を創出しようとするのは、歴史の趨勢である<sup>(注24)</sup>。

こうした見方は、開明的な政府与党首脳、とりわけマハティール首相の指導によって「構想」の理念が実現できる、と考える点で、華人系与党の見方と通じており、政府与党首脳の強権的手法を最大の脅威とみなす野党系華人の見方は著しい対照をなしている。

## II 同化・画一化への懸念

### 1. 野党系華人

最大の華人系野党、民主行動党 (Democratic Action Party: DAP) は、当初から「構想」に猜疑の目を向けた。1991、92年に機関紙 *Rocket* は、次のような批判を行った<sup>(注25)</sup>。

- (1) 「構想」は国会で討論されておらず、内容を指導者の意のままに変えられる。
- (2) 「構想」は策略に過ぎない。現在の政策は逆行しており、公正、機会均等、貧困解消への前進はない。
- (3) 国民戦線への無条件委任であり、反対意見、司法も不要とされる。人間の尊厳・自由も棚上げ。少数への権力の過度の集中。平民に権利なし。
- (4) 母語教育保護、憲法順守を。ジョホール、ヌグリ・スンビランなど諸州における回教

化、回教法制定の停止を。

- (5) 公開性、法治、政権の清潔さに欠ける。
- (6) 「いずれの日にか極楽が実現する。そのために個人は犠牲に。偉大な指導者に応えよう」との共産中国の約束を思わせる<sup>(注26)</sup>。

このうち種族間の「機会均等」などについては、1995年の総選挙の際、同党も、一定の前進があったこと、それが与党の大勝につながったことを認めている。しかし、「構想」が民主主義の欠如、権力の集中と併存していることへの危惧は、在野勢力の間では今日も依然衰えていない。

DAP の批判的見解を主導しているのは、曾慶豹 (Chin Ken Pa)、丘光耀 (Hew Kuan Yau) の若手論客である。

曾は1995年に著したやや扇動的な題名の本の中で、「構想」は多元的視野をもち、華人の伝統文化、価値、とりわけ儒教思想を活用できる、と一定の評価を示す<sup>(注27)</sup>一方で、次のような批判を展開した。

- (1) 「構想」「マレーシア民族」は、意識操作によって上から与えられた一体化・画一化である。国民戦線のいう「多元化」は単一意識の下での「内部多元」=「去異求同」(違うものの存在を認めない。先述の“存異求同”の対極にある概念)である。言語、宗教、文化の差異を消滅させようとしている。
- (2) 民主、人権、環境を西欧の発想として情緒的、非理性的に排斥し、汚職、金権政治、司法不公正を是認。
- (3) 反西欧宣伝の中で、国内の異論は「構想」のユートピアを阻む外敵と見なされる。マハティール首相は対外的には「反支配」だ

が、国内では新権威主義。回教原理団体アルカム Arqam の禁止に見られるように、首相は回教解釈権も握り、マレー人の中にも異論を許さなくなった。

(4)政府は全能、指導者は神聖になって、神話政治、宗教政治が現出しつつある<sup>(注28)</sup>。

曾慶豹は翌1996年、一層鋭い批判書を上梓した。同書の中で曾は、マレーシアは国家であって民族ではないとして、Bangsa Malaysia に「マレーシア国族」の訳語を充て<sup>(注29)</sup>、以後国内に「国族」が流布するきっかけを作った。しかし実はこれは彼の造語でなく、すでに1993年に台湾の楊聰榮の論文<sup>(注30)</sup>で使われている。楊は、「18世紀以降のヨーロッパの中央集権政府が国家統一のために強制的同化政策によって均一な nation, 文化, 言語を創り出した」とのアンダーソンの説<sup>(注31)</sup>を紹介した中で、この nation に「国族」の語を充てているのである。台湾に留学した曾がこの論文を見た可能性は高い。楊はこの論文で国民党政府の採った「台湾中国化」政策を論じているのだが、「官制国家民族主義」の特色として、「一つの正統文化を作って均質な文化の基礎とする。一つの族群 (ethnic community の訳であろう——引用者) を中心に据え、特定地方の言語を選んで標準語として普及させ、以て一つの『民族』を構築する。新たな一つの『国族観』を創出し、以て帝国を領域とする Nation に現代民主国家を建設する」を挙げている。国家が強権を以て単一文化、単一民族を形成することへの危惧、つまり国家による強制的同化への危惧、という視点<sup>(注32)</sup>は、そのまま曾の視点になっている。

曾はこの書で次のような見方を披瀝している。

(1) Bangsa Malaysia に対し、マレー知識人はマレー人の一体性 (Malay identity) の喪失を問題視した。政府は、反発を和らげるため「新マレー人」 (Melayu Baru) を発表した。

(2) 「新マレー人」と「マレーシア国族」とは不可分で、むしろ前者が基軸になっている。マレー文化、マレー語、回教を基礎としそれを全国民に押しつける「文化覇権」である。

(3)文化問題を回教現代化に矮小化。回教教義をめぐって、科学技術への適応を唱え、現世の努力、幸福も来世と同様重要として、資本主義活動への支障を取り除こうとしている。

(4) 「新マレー人」はマレーシアのみでなく、マレー世界、回教世界を視野に、マレー人による ASEAN 支配を目指す<sup>(注33)</sup>。

一方、DAP 社会主義青年団 (DAP 青年部) 教宣部長を務める丘光耀の主張は次のとおりで、華人反対派というより民主社会主義的観点からの異論だと自任している。

(1) 「構想」は、両面 [批判と肯定] 社会または多面社会から反対派なき画一社会への移行を目指すもの。

(2)文化覇権 (文化支配権) により、倫理、道徳、世界観などにおいて華人の馴化を狙う。仮構の自由意志・同意により統治集団の政策を受け容れる状態、を創り出そうとする。‘主体’は上から造られ、‘主体性’は支配者の‘免除権’ (裁量権) の下に置かれる。華人は‘ニセの要求’ (消費、娯楽、広告等) を満たされ、‘不幸の中の幸福感’に浸っ

て、‘真の要求’（1957年憲法に基づく権利。ブミプトラ・非ブミプトラの区別のない社会）を忘れる。

- (3) ‘全能、無謬の指導者’論、野党無用論である。華人の‘圧力路線’を根絶するため、一定の‘開放政策’、‘協議路線’を採り、支持拡大に成功した。マハティールの‘小開放’について、MCAは「1970、80年代の妥協の成果」と自賛するが、DAPは「野党の運動＝圧力の成果」と見る。異論がなければ社会は発展しない。
- (4) 政府は、1990年の華人団体造反（有力団体指導者のDAP集団入党）の教訓から同化政策を中断し、華人団体に浸透して「和平演変」（平和裡に変質させること）を図った。その結果華人団体は脱政治化した。
- (5) 政府は予先を西欧に向け、文化的退廃を西欧文化に帰すようになった。マハティール首相の言う「アジア的価値観」とは、西欧の新保守主義＋東方の全体主義＋権威主義＋民営化＋党・国家資本主義である。我々の求める価値観は、自由＋公正＋団結互助＋平和＋物質的保証＋特権反対＋機会の平等（旧社会主義国が唱えたような「結果・分配の平等」に反対）である。まず‘人’を確立し、次いでマレーシア人、アジア人の視点を。
- (6) 人権、アジア的価値観に関して、マハティールは、中国の改革開放政策支持、天安門事件抑圧支持などで華人の中国への民族情緒〔民族情義結〕を利用した<sup>(注34)</sup>。

他方、種族の枠を超えて社会公正・社会正義を追求する知識人団体「アリラン」（Aliran:

「潮流」の意）の羅国華（Francis Loh Kok Wah）は未刊行の論文の中で次のように論じて、文化政策穏健化（非マレー文化の受容）の裏面で進む権威主義体制強化と大衆の政治への無関心に警鐘を鳴らしている。

「国家文化」は争点から外れ、「多元文化」促進が観光用に利用されるようになった。マハティール首相は1995年に各種族の文化、宗教、言語保持を容認したが、マレー人全体の間ではまだ合意はない。これは文化政策穏健化の現れではあるが、必ずしも健全な現象ではない。1987、88年の政府批判派取締りでマハティール首相の権威体制が確立し、他方で大量消費と個人主義の時代に突入して、個人の孤立化、安定志向、事大主義、政治的無関心が蔓延した。国民戦線内指導者すら、内外の重要争点について発言に尻込みが見られる<sup>(注35)</sup>。

## 2. 華字紙

先述のように華字紙には、「マレーシア民族」に関して強制的同化を意味するのではないかと危惧する論調が多い。

『新通報』1994年4月19日の「欧陽文風」署名論文「新愛国主義」は、「構想」以降高まった愛国心に関連して、「愛国と政府擁護とは別である。新愛国主義は愚忠、愚孝を排し、森林乱伐、水源汚染などには反対する」と政府礼賛論に釘を差した。

『中国報』1995年7月31日の「馬明」署名論文は、「今マレーシア民族を論ずるのは現実遊離。単一のマレーシア民族創出を強制する必要はない。文化、血統の強制はできない」「多元



種族文化を『マレーシア文化』に一本化する必要なし。多民族文化を包摂した多元文化はすでにあり、これこそがマレーシア文化の特色」と、民族、文化の一本化に反対した。同紙8月2日は、先述のガザリ提言に反発して、「自然の(強制のない)状態の中で、長い時間をかけて初めて、各族に受け容れ可能なマレーシア文化が形成される。華人同士、インド人同士の間、家庭内でもマレーシア語を日常語化させるのは無理だ。アメリカには“アメリカ民族”論議などない」と論じた。

『星洲日報』1995年7月15日の葉慶炎論文「維護各民族權益的連想」(各民族の利益を守ることに思う)は、マハティール首相が1994年11月のUMNO大会で「UMNOはマレー人のみでなく非ブミプトラの利益を守る」と表明し全国民が歓迎したこと、すでに身分証明書(IC)など一部の公式文書から種族欄が削除されたこと、などをもって政府の姿勢を評価する一方、「総合教育、総合文化は可能でも、総合宗教は無理だ。栄辱共有の『マレーシア民族』形成には何世代もかかる」と慎重姿勢を示した。

同紙1995年8月15日の許春「不要輕視別族」(他種族を輕視すべからず)は、「一民族が他民族を蔑視すれば対外的には国と国との戦争、対内的には種族争乱が起きる。『マレーシア人』成功にはマレー族の他に対する態度が決定的要素になる」とマレー人の姿勢への不信が依然残ることを示唆した。

さらに同紙1995年8月25日の林瑞源「塑造大馬族的条件」(『マレーシア民族』創出の条件)は、「当初野党は『マレーシア民族』を同化政策ではないかと疑ったが、今では皆『構想』の一日標であって否定的側面はないことを理解した」

としつつも、「まだ皆『マレーシア民族』の呼称は受け容れられない。各族が経済、教育、文化政策上対等な地位を享受し、他種族への嫌悪、猜疑を消し去って初めて、種族融和を実現できるのである」と、マレー人優位のままの単一民族化に不安を覗かせた。

### III 中間的見解：融合の具体像

これまでに分析した「マレーシア民族」への賛同、反発両論とは一步距離を置いて、冷静に融和の具体像を求める議論がある。代表的な論者はババ華人研究者の2人で、華人社会に広く受け容れられているわけではないが、現実のババ社会という具体像を挙げて今後の華人社会の将来像を示している点で、説得力を持っている。なお、ババとは、イギリス植民地以来何世代にもわたってマラヤ・マレーシアに住み、独特の中国・マレー折衷文化を身につけた人々を指す。

自らもクランタン・ババ出身で現在マラヤ大学中国学科で華人社会論を講ずる謝愛萍(Chia Oai Peng)は、1995年1月1日の『星洲日報』に「族群關係与文化因素」[族群=種族=関係と文化要素]と題する一文を寄せ、次のような主張を展開した。

- (1)1950、60年代は一言語、一民族、一国家を目指していた。
- (2)マレー文化、華人文化には共通点(長老尊敬、家庭重視、弱者扶助など)、相違点があり、それぞれ優秀性を持つ。相互容認を。
- (3)経済発展でUMNOは、狹隘な種族主義にこだわらず新たな価値観を探るようになった。しかし華人は、教育、文化、言語問題で未だに決着をつけられず、新たな思想領

域に入れない。

(4)「族群」間の衝突、緊張の主因は思想。教育が思想を変えうる。

(5)各民族文化がそれぞれの優秀性を持つことを理解させよ。開明、平等を基礎に、教育水準を高め、各族人民が誠意をもって交流すれば、クランタン農村のように相互理解、文化相互尊重が実現できる。

クランタン農村に住む華人がどれほど華人文化、華語などを保持し得ているかについては、おそらく西海岸の都市華人には異論があらう。マレー文化の優越性を受け容れた上での「相互理解、相互尊重」ではないか、との反論も成り立ちそうだ。しかしクランタンの状況が西海岸都市部の状況よりはるかに平穏で安定していることは、度々起こる種族間緊張が同州では報じられないことから明らかだろう。

もう一人のババ研究者・陳志明 (Tan Chee Beng) (元マラヤ大学中国学科。現香港中文大学教授) は、1995年6月6日の *Star* 紙上で、「マラッカ・ババは大抵華語を話せないが、クランタン農村のプランナカン (Peranakan: 何世代にもわたって住み“土着化”した華人を指し、ババとほぼ同義) は今も福建語を話す。それなのに、驚くべきことにクランタン華人の方が融合が進んでいる。クランタンの方がマレー人との社会的交流が盛んだからだろう。ババの (マレー社会との) 文化統合の歴史的経路が、マレーシアの他の地域でも繰り返されている、といえよう」と述べている。華語を保持したままの種族融和はマレーシア社会全体にも敷衍できるのではないか、と考えるわけである。

「マレーシア民族」礼賛でも拒絶でもない、

第三の立場といえよう。

## む す び

Bangsa Malaysia (マレーシア民族) は、種族の垣根を取り払い種族の融和、対等性を実現するものとして提唱されたものだが、華人の受け止め方は次第に大きく分裂した。そもそもマハティール首相自身が真に対等性実現を目指しているかどうかにも疑問の余地が残されている。マハティールの青年時代からの思想を克明に解析した邱武徳 (Khu Boo Teik) が、「構想」「マレーシア民族」はマレー人を非マレー人の水準にまで引き上げようとする「マレー民族主義」と「マレー性」を克服してマレーシアを先進国に引き上げようとする「マレーシア民族主義」との混合物、としていること<sup>(注36)</sup>からも、その点が窺える。その意味では、「マレーシア民族」に潜むマレー至上主義に警戒感を解かない野党側の見方は、当然なのかも知れない。

MCA, GRM など華人系与党あるいはそれに近い人々が目標を額面どおりに受け止めて、(1)与党内各種族が対等の立場で、忍耐強く、互譲・寛容の精神をもって話し合うことによってそれが実現できる、(2)回教政党 PAS の回教強制策が「多様性を認めた上での統合」への最大の脅威である、と見るのに対して、DAP など野党系華人は、(1)「マレーシア民族」は強権的なマレー人、マレー文化への同化による単一民族の形成である、(2)「マレーシア民族」形成には政府与党への全面無条件委任が求められている、(3)しかし与党内非マレー人政党に UMNO と対等な立場は望むべくもない。しかも首相などごく少数の最高首脳への権力集中が進み、彼らが

上から「マレーシア民族」のあり方を律することになる、(4)宗教上の強制同化の危険性はむしろ、UMNO が非マレー人と与党の追随を得て各州（スランゴール、ヌグリ・スンビラン、ジョホール、トレンガヌ、マラッカ）で進めている回教化、回教法の非回教徒への適用にある、との立場を採っている。

いずれの視点が事実を正確に反映しているかを見極めるにはまだ早い、1998年9月のアンワール副首相解任・逮捕に伴う政治的混乱で、「構想」も「マレーシア民族」もマレーシア国民の関心の対象から遠のいてしまった観がある。野党系華人は「改革」「民主化」を掲げてマハティール首相に挑戦するアンワール元副首相に、その面では期待を寄せ共闘もしているが、元副首相が回教運動の旗頭であるところから、宗教、文化、言語面では不安を払拭できないようだ。近い将来マハティール首相が退陣し、仮にアンワール派が政権に就いたとすれば、「構想」も「マレーシア民族」も顧みられなくなるかも知れない。それが華人にとって望ましい方向だと言いつけることは、野党系華人にも難しだろう。

いずれにせよ、多くのマレーシア人が、首相への過度の権力集中がマレーシアの政治・経済・社会にひずみをもたらした、と見るようになったことは否定できず、権力集中状況下の「マレーシア民族」創出に危惧を表明した見方は、その限りにおいて正鵠をついていたことになる。

〔追記〕 マレーシア（マラヤ）の「一国家一民族」論争には、実は先例がある。第二次大戦後のマラヤ独立要求運動の過程で、1947年8月にマレー人、華人、インド人各左翼勢力が、マラヤに永住を望みマラヤに忠誠を誓う全種族住民に差別なく「ムラユ Melayu」国籍を認めることを謳った

「人民憲法」に合意した際、中国民主同盟マラヤ支部（主任：胡愈之 Hu Yu-zhi）関係者が、新たな統一民族「ムラユ」の創出を称賛し、要旨次のように論じたのである。

民族とは、歴史的に形成された、同一の言語・領土・文化・風俗習慣・経済生活を有する集団で、血統・宗教は同一とは限らない。

国家には単一民族国家と複合民族国家があり、後者は連邦国家として各民族の自治区を認めている。独立前のマラヤにはいくつかの種族があり華僑はその一つだが、各種族の共通の利益のために連合してマラヤ民族を創出できる<sup>(注37)</sup>。

これに対し、マラヤ共産党シンガポール駐在代表（当時）の張明今 (Zhang Ming Jin) は、追真 (Zhui Zhen) の筆名で、マラヤ人民抗日軍退伍同志会（マラヤ人民抗日軍解体後の団員組織）機関紙『戦友報』で要旨次のように反論した。

単一民族「マラヤ民族」創出は、国内各民族の特性を圧殺するものである。マラヤでは戦前から華僑は「馬華民族」を形成できるとの説があった。「馬華民族」とはマラヤの経済生活と密接なつながりを持ち中国の経済生活とは切り離された華人を指しており、依然中国の経済、政治、生活と密接な関係を保つ華僑とは別である。

植民地統合下で単一民族創出を謳う人民憲法は、マラヤの歴史発展の新段階にそぐわない小資産階級の幻想である、マラヤは多民族国家であり、植民地統治終結後、各民族の地位平等、利益均衡、自由な発展、自発的結合が実現できないようでは、多民族連合国家への信頼はしぼんでしまう<sup>(注38)</sup>。

「ムラユ民族」「マラヤ民族」を「マレーシア民族」と置きかえれば、今日の論争とよく似ている。

独立10余年前の論争は、この後間もなく植民地当局による左翼勢力への徹底的抑圧、マラヤ共産党の武装闘争開始によって圧殺・封印された。論争が自由に展開されていれば、今日なお残る種族問題の少なくとも一部には解答が見出せていたかも知れない。

(注1) Mahathir Mohamad, *Malaysia: The Way Forward* (Kuala Lumpur: Centre for Economic Research & Services, Malaysian Business Council, 1991), pp. 2, 3.

(注2) G. P. Daniel, *Dr. Ling Liong Sik and the Politics of Ethnic Chinese Unity* (Shah Alam: Federal Publications, 1995), pp. 98, 99, 100, 136.

マレーシア華人公会 MCA の黄思華 (Dk. Wong See Wah) 副委員長は1994年12月18日付の『中国報』紙上で、「(連立与党) 国民戦線 (Barisan Nasional) は種族主義、回教化に反対する政党になった。心強い」と述べている。同党の陳祖排 (Dr. Ting Chew Peh) 書記長 (当時) も1995年1月26日の『星洲日報』で、「種族関係は空前の融合を遂げた」と自賛した。

(注3) Daniel, *Dr. Ling Liong Sik and . . . . .*, p. 102.

(注4) Ibid., p. 107.

(注5) Ibid., pp. 109, 137, 138.

(注6) Ibid., pp. 110, 111.

(注7) Ibid., pp. 112, 134.

(注8) Ibid., p. 122.

(注9) Ibid., p. 128.

(注10) Ling Liong Sik, *The Malaysian Chinese: Towards Vision 2020* (Petaling Jaya: Pelanduk Publications, 1995), Preface および p. 52

(注11) Ibid., pp. 13, 37.

(注12) Ibid., pp. 20, 21.

(注13) Ibid., p. 81.

(注14) Ibid., pp. 85, 86.

(注15) Ibid., pp. 109-111.

(注16) Gerakan Rakyat Malaysia [民政運動党], “Ucapan YB Dato’ Seri Dr. Lim Keng Yaik, Presiden Nasional Parti Gerakan Rakyat Malaysia” [林敬益委員長挨拶], Persidangan Perwakilan Nasional Ke 26 [党26回代表大会], 1997, pp. 6-13.

(注17) Alex Lee, “Towards a United Malaysia Nation,” Presented at the First International Malay-

sian Conference on Vision 2020 at ISIS Kuala Lumpur, on 20th December 1993.

(注18) 馬來西亞華人公会『新馬來西亞人 政治論文比賽佳作選輯』(Kuala Lumpur: 馬華中央宣伝局, 1998年)。以下、『佳作選輯』と略す。同書によれば、1990年代初頭にマレー人若手政治家が提唱した「新マレー人」(Melayu Baru) の向こうを張って1993年9月28日にクアラルンプール・スランゴール中華工商連合総会の顔清文 (TS. Ngan Ching Wen) 会長が「新華人」を提唱し、97年9月10日には林良実 MCA 委員長が「新馬來西亞人」を提唱した。「新華人」は、華人の優秀な価値観を振興し陋習を排して21世紀の高度技術に目を向け、国内他民族 (ママ) と協力して「構想」実現を目指す。ここにはまだ種族本位の色彩があるが、「新馬來西亞人」は種族、皮膚の色、宗教、文化を基準とする思考を脱却し、個人の性格、価値観を基準として、理性、冷静な協議、中庸思想に基づいて、マレーシア民族の一体感を打ち建てようとするもの、とされる (3, 4, 71頁)。「新馬來西亞人」は Bangsa Malaysia とほぼ同義と見てよからう。

(注19) 例えば、回教と儒教とは共通の東洋的伝統・価値観 (家庭強化、汚職反対など) をもっている、とする。『佳作選輯』32, 33頁。

(注20) 『佳作選輯』各論文の論点を要約。

(注21) 『南洋商報』1995年7月31日。

(注22) 「敵防種族思想復発」[種族思想の復活を断固阻止しよう]と題する社説。

(注23) 謝普喬「大馬民族的理念」[マレーシア民族の理念]。

(注24) 林金枝『民族主義的思考』(Petaling Jaya: 南洋商報, 1996年)の論点を要約。

(注25) *Rocket*, no. 24/5, 1991.

(注26) *Rocket*, no. 25/1, 1992.

(注27) 曾慶豹『2020内悪犬——社会文化政治批判論集——』(Kuala Lumpur: 東方企業, 1995年) 155~159頁。

(注28) 同上書の論点を要約。

(注29) 曾慶豹『与2020共舞——新馬來人思潮与文化霸權』(Kuala Lumpur: 華社資料研究中心, 1996年) 5頁。

(注30) 楊聰榮「從民族国家的模式看戰後台灣的中國化」[民族国家モデルから戦後台湾の中國化を見る] (隔月『台湾文芸』総号138期 創新18号 1993年8月)。

(注31) Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (London: Verso, 1983).

(注32) 楊聰榮は、強権的同化の例として、中華民国以後「満、蒙（モンゴル）、回、蔵（チベット）を漢族に同化させ中華民族を創り出したこと、言語を『国語』に統一したこと」を挙げている。

(注33) 曾慶豹『与2020共舞……』の論点を要約。

(注34) 丘光耀『第三条道路——馬來西亞華人政治選択批判』(Petaling Jaya: HTTP Sdn. Bhd., 1997)の論点を要約。

(注35) Francis Loh Kok Wah, "Ethnicism, Developmentalism and Democracy in Malaysia,"

Working Paper submitted to "Discourses and Practices of Democracy in Malaysia," Organized by Universiti Sains Malaysia, 18, 19 July, 1998. の論旨を要約。

(注36) Khoo Boo Teik, *Paradoxes of Mahathirism: An Intellectual Biography of Mahathir Mohamad* (Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1995), pp. 329, 333.

(注37) 『風下』第81期 1947年6月28日, 第117期 1948年3月13日。

(注38) 『戦友報』第83期 1948年3月16日, 第86期 1948年5月1日。

(南山大学外国語学部教授)